



よき「師」であっただろうか

園長 笛木哲

弥生3月。カレンダーの写真は一気に春めいてまいりました。菜の花が揺れ、桃が咲き、遠くには雪解けの山なみ。カラフルな春景色が、冬のモノトーンの殻を割りました。園庭の桜の花芽がふっくら膨らみ、卒園の合図のように、薄桃色の花卉が枝いっぱいに群舞する日は、遠くないことでしょう。

小学生時代、私は体育が苦手で、とりわけマット運動の日は苦痛でした。4年生の時、飛び込み前転を軽々と決める友だちとは別に、隅っこで不安と恐怖と戦っていました。私には、丸めたマットを飛び越え、前転することは不可能に思えました。その日は突然やってきました。マットを飛び越えるというよりつまずいたのかもしれませんが。気づくと丸めたマットを飛び越えていました。無様な格好だったでしょうが、その瞬間、担任の川端先生は「笛木君、うまい」と講堂いっぱいに響く声で褒めてくださいました。その時の言葉は今でも耳に残っています。舞い上がるほど嬉しかった私は、川端先生の言葉に勇気づけられ、その後、友達の前で飛び込み前転を披露したような記憶があります。できた瞬間を見逃さずに放った川端先生の一言。体を動かすことが好きになった瞬間です。なにより、私が教師になったのはこの言葉のおかげです。

今、「個性の尊重」「価値観の多様化」など、一人一人のもつよさを引き出すことが強調されています。それはとても大切なことですが、そんな思想が高じて、他から学ぶことを嫌い「師」を軽んじる風潮があるように感じます。「師」から学べなければ、わがままで、臆病で、絶えず揺れ動く自分を頼みに学ぶ他



ありません。それほど頼りなく効率の悪い学び方はありませんし、未熟なままに社会に出ることになりかねません。よき子が育つには、よき「師」の存在が欠かせません。

さて、その前提として、私たちとねがわ幼稚園の教師は、よき「師」たる資質や品格、教養をもっていただろうかと自問します。教師になろうと決めた日、その原点に立ち戻り、教えるプロとしての自覚と責任をもう一度見つめ直し、残された日々を子どもたちと、真剣に、濃密に過ごしてまいります。3月のぬくもりの中で。

本園の教育を信頼してくださり、ありがとうございました

令和4年3月末、園児は、笑顔いっぱいに進級、進学します。身長が伸びるように、どの子も知恵を身につけ、心を豊かにし、体力を高めました。これはひとえに、とねがわ幼稚園の教育を信頼し、大切なお子さんを託してくださった保護者の皆様の温かなご支援の賜と御礼申し上げます。また、全ての出会いに心より感謝いたします。

子どもの「ことば」



- コバトンが来たときの集合写真をエントランスに張り出しておきました。右下には写真の値段が書かれています。それを見た年少さんは、「園長先生、折り紙のお金で買えるの？」…子どもたちの世界で流通する端紙に数字が書かれたお金。10円といった手に届くお金もあれば、1の次に0が20個もついたお金もあります。その位のお金があれば、自分の写った笑顔の写真も買えそうですね。
- 帰りのバスの中で「神様が見える」と言う子の言葉に、皆がどこ？と探します。「また神様が見えた」という指さす方を見ると、そこには裾野を広げた富士山がありました。彼女にとって富士山は神様の現れなのでしょう。するとお友達が「神様がこの世界を作ったんだよ。サンタクロースも手伝ったんだよ」…生まれた時にお宮参りをし、結婚式は教会であげ、葬儀は仏式と様々な宗教が渾然一体としている私の人生です。信仰心は薄く、神仏を拝む頻度も低い今の私です。それでも、子どもの頃、祖母に「いつだってお天道様に見られているんだよ」と教えられました。富士山を神様に思う彼女の敬虔な気持ちはきっとご両親、祖父母の方から教えていただいたものでしょう。子どもの中にいる神様は、とつても尊いものであるはずです。
- 子「僕はお金をいっぱい持っているよ」 保育者「100円くらい？」 子「500円よりいっぱいだよ。ママは貯金をしなさいって言うんだ。でもね、こんなにお金持ちでも怪我をしたんだよ(夕ご飯の時の鮭の骨が刺さったということです)。…どんなにお金をもっている幸せでないことくらい、子どもも知ってます。
- 園庭の上を飛んでいく飛行機を見て、「戦争みたいだね」と年長児がぼつり。…ニュースを付ければ毎日のようにミサイルによって壊される建物や火を噴く戦車。子どもたちに今の世界の悲惨さを教えることは、とても難しいです。

忘れてはならない日 2011年(H23年)3月11日 1945年(S20年)3月10日

東日本大震災から、12年が経ちました。あの日、八ツ保小学校にいた私は、机の下にもぐる子、立ちすくんで身動きとれない子と、遠く宮城県沖を震源とする大地の揺れに小さな胸を震える子どもの姿を見ました。今思うと、あのときの恐怖は、震源地に近い東北の人の何分の一だったことでしょう。その復興はまだ道半ばです。

今から約80年前の3月10日未明、B29爆撃機(279機)は、たった3時間足らずで東京下町を焦土にしました。隅田川の川面は死者で埋まり、約10万人が非業の死を遂げたとされています。東京スカイツリーの足元を流れる北十間川にも、遺体が折り重なり、その中には小さな子の遺体も浮いていました。母を探してさまよい歩く裸足の子、亡くなった子を腕に抱きしめ視線の定まらぬまま血を流し続ける母の姿…。今更ながら戦争の悲惨さを思わずにいられません。

3月11日、そして3月10日も忘れてはならない追悼の日です。目の前の子どもたちには、自然災害に負けない知恵とたくましさを持ち、戦争のない幸せな未来を生きて欲しいと願わずにはられません。

